

大学生における絶望感および抑うつ傾向 と原因帰属様式の関係*

桜井 茂 男**・桜井 登世子***

(心理学教室) (桜井人間科学研究所)

要旨：研究1では、大学生を対象に、Beckら（1974）による絶望感尺度の日本語版が作成され、信頼性と妥当性が確認された。研究2では、大学生の原因帰属様式、絶望感（研究1で作成された尺度を使用）、抑うつ傾向が調べられ、改訂LH理論の仮説が検討された。その結果、成功事態における原因帰属様式が絶望感と理論どおりに関係することが見いだされた。しかし、失敗事態における原因帰属様式が絶望感あるいは抑うつ傾向と理論どおりに関係する結果は得られておらず、改訂LH論理は積極的に支持されたとはいえない。今後の課題としては、原因帰属様式尺度の信頼性を高めた上で同様の研究をすることが望まれる。

キーワード：原因帰属様式、絶望感、抑うつ傾向、学習性無力感

近年、欧米では抑うつ（depression）傾向と原因帰属様式（causal attributional style）との関係を検討した研究が増えている。これは主にSeligman, M. E. P.らの提唱した学習性無力感（learned helplessness；略してLH）理論が改訂され、両者の関係が重要であると指摘されたためである（Abramson, Seligman, & Teasdale, 1978；Seligman, Abramson, & Semmel, 1979）。改訂LH理論では、成功経験の原因を外的、変動的、特殊的な要因（たとえば、まれにみる幸運）に求める「正の抑うつの帰属様式」と、失敗経験を内的、安定的、全体的な要因（たとえば、一般的な能力の不足）に求める「負の抑うつの帰属様式」をもつ者はそうでない者に比べて、抑うつになる可能性が高いと提案されている。

Seligmanら（1979）は、このような仮説を検討するために、大学生を対象に原因帰属様式を測定する尺度（Attributional Style Questionnaire：ASQ）を開発し、抑うつ傾向との関係を相関分析により吟味した。その結果、負の抑うつの帰属様式を確認することができた。わが国では、小島（1983）と新名（1984）が同様の分析を試みているが、前者ではほぼ正の抑うつの帰属様式が、後者では全体性次元を除いた正・負の抑うつの帰属様式が見いだされている。

* The Relationship among Hopelessness, Depression, and Causal Attributional Style in College Students.

** Shigeo Sakurai (Department of Psychology, Nara University of Education, Nara)

*** Toyoko Sakurai (Sakurai Institute of Human Sciences, Mino, Osaka)

ところで、Beck (1972) によると、抑うつのもっとも重要な構成要素は絶望感 (hopelessness) であるという。これは、一般に「自己の将来に関する否定的な期待」(Stotland, 1969) と定義されている。換言すれば、自分の将来に望みがないという自己認知である。もし、Beckの指摘どおり絶望感が抑うつのもっとも重要な要素であるとすればAbramsonらが提案した改訂LH理論はこの絶望感を対象にした場合にも支持される筈である。これまでの研究にはこのような視点は見当たらない。

そこで、本研究の第一の目的は、大学生を対象に、Beckら (1974) の絶望感尺度の日本語版を作成し、その信頼性と妥当性を検討することである (研究1)。第二の目的は、ASQの日本語版 (小島、1983) で原因帰属様式を測定し、これと抑うつ傾向および絶望感との関係を検討することである (研究2)。

研 究 1

目 的

Beck (1974) が開発した「絶望感尺度 (Hopelessness Scale)」の日本語版を作成し、その信頼性と妥当性を検討する。

方 法

被調査者 公立大学の大学生111名 (男子59名、女子52名)。

質問紙 絶望感尺度 : Beckら (1974) の20項目からなる絶望感尺度をできるだけ原文に忠実に日本語訳した。元尺度は「true-false」形式による2件法であったが、予備研究で回答しにくいとの報告が多かったので、「はい」、「どちらかといえばはい」、「どちらかといえばいいえ」、「いいえ」の4段階評定とした。絶望感の強い回答から4, 3, 2, 1点と得点化された。したがって、可能な得点範囲は20点から80点である。20項目のうちには9項目の逆転項目が含まれていた。日本語訳された絶望感尺度が付録に示されている。

抑うつ尺度 : Zung (1965) が開発したSDS (Self-rating Depression Scale) の日本語版 (福田・小林、1973) を妥当性の検討のために用いた。これは20項目で構成されており、4段階評定 (4, 3, 2, 1点) である。得点が高い程抑うつ傾向が高いことを示す。可能な得点範囲は20点から80点である。

手続き 上記の2つの尺度を集団実施した。

結 果 と 考 察

絶望感尺度20項目の全体得点と項目得点との相関係数を算出したところ、その範囲は.20~.77であった。Beckらの元尺度では.39~.76であるから、やや低い項目が含まれていた。項目no. 5だけが.20 ($p < .05$) ととびぬけて低かった。その他は、.39 ($p < .001$) 以上であり、元尺度と同じである。本研究では元尺度との共通性も考慮して、20項目すべてを最終的な日本語版絶望感尺度として残すことにした。尺度平均は37.52、標準偏差は7.63、得点範囲は23~59であった。

本尺度の可能な得点範囲は20～80であるから、本研究における被調査者は低得点側へ傾斜していると言えよう。男女別の平均得点は、男子が37.32 ($SD=7.31$)、女子が37.75 ($SD=8.03$) であり、性差は認められなかった ($t(109) = .29, ns$)。

つぎに因子分析を行った。主因子法によって因子を抽出し、固有値の変化をみたところ、5.64, 1.78, 1.54, 1.34・・・であり、明らかに第一因子と第二因子の間にギャップが認められた。したがって、本尺度は単因子構造とみるのが適当であろう。この単因子による寄与率は28.2%であった。Beckら(1974)では3因子を抽出しているが、寄与率をみると41.7%, 6.2%, 5.6%となっており、Cattellのscree testによれば単因子構造ととらえた方が適当と考えられ、本研究の結果と類似している。20項目による尺度の内的一貫性を α 係数により推定したところ、.83という高い値が得られた。したがって、信頼性も十分といえよう。

妥当性を検討するために用いたSDS抑うつ尺度日本語版の平均は38.82 ($SD=6.70$) であった。絶望感尺度得点とSDS尺度得点の相関は.57 ($p < .001$) であり、一応の妥当性が認められた。妥当性の検討は因子分析とSDSとの相関だけであり、今後多方面からの検討が必要である。

研 究 2

目 的

大学生を対象に原因帰属様式と抑うつ傾向および絶望感(研究1で作成)との関係を改訂LH理論に沿って検討する。

方 法

被調査者 公立大学の大学生123名。未記入項目の認められた者30名を除き、有効被調査者数は93名(男子48名、女子45名)であった。

質問紙 原因帰属様式、抑うつ傾向、絶望感を測定する3種類の質問紙が用いられた。後二者は、研究1と同じ質問紙である。

原因帰属様式の測定には、Seligmanら(1979)が開発したASQの日本語版(小島、1983)が用いられた。この質問紙は、正・負(成功・失敗)の事態(各6つの事態)に対して、①内在性(internality)、②安定性(stability)、③全体性(globality)、④統制不可能性(uncontrollability)、を7段階(1-7点)で測定できるように作成されている。事態別次元の可能な得点範囲は6点から42点である。これら4次元の測定は両極性の尺度を用いており、内在性が低いということは外在性が高いことを意味する。以下同様に、安定性の反対は変動性、全体性の反対は特殊性、統制不可能性の反対は統制可能性である。

手続き 講義時間の最後に、被調査者の了解を得て集団実施した。

結 果 と 考 察

絶望感の尺度およびSDS抑うつ尺度について、平均、標準偏差、得点範囲、 α 係数が求められた(表1参照)。平均、標準偏差、得点範囲は研究1とかなり近い値を示している。絶望感尺度

の α 係数も研究1と同じである。SDS抑うつ尺度の α 係数は絶望感尺度よりやや低いが、.79であるから信頼性は認められよう。

表1 絶望感尺度および抑うつ尺度の
平均・標準偏差・得点範囲・ α 係数 (N=93)

尺度	平均	標準偏差	範囲	α 係数
絶望感	36.94	7.60	23~55	.83
抑うつ	38.95	6.92	25~56	.79

また、日本語版ASQの平均、標準偏差、 α 係数が表2に示されている。負の事態における内在性および統制不可能性の α 係数が.07, .38とかなり低く、信頼性が疑わしい。その他の α 係数も決して高くはなく、本来ならば.70程度はほしい。事態別次元の信頼性が低いことはASQの短所であり、今後の改善が必要である。一つには、事態を正・負(成功・失敗)だけではなく、対人事態と達成事態というように領域別にするのが考えられる。

表2 原因帰属尺度の平均・標準偏差・ α 係数 (N=93)

次元	正の事態			負の事態		
	平均	標準偏差	α 係数	平均	標準偏差	α 係数
内在性	27.50	5.90	.59	28.90	4.29	.07
安定性	32.00	5.00	.58	31.09	4.78	.52
全体性	31.05	4.98	.51	27.77	5.35	.54
統制不可能性	22.91	5.81	.48	21.45	5.01	.38

表3 絶望感尺度および抑うつ尺度と原因帰属尺度の相関係数 (N=93)

次元	正の事態		負の事態	
	絶望感	抑うつ	絶望感	抑うつ
内在性	-.37***	-.21*	-.09	-.05
安定性	-.37***	-.14	.02	-.11
全体性	-.23*	-.12	-.06	-.05
統制不可能性	.19+	.19+	.20+	.25*

*** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$, + $p < .10$

つぎに絶望感および抑うつ尺度得点と原因帰属様式（事態・次元別）得点との相関係数が求められた（表3参照）。正の事態の原因帰属様式と絶望感との間に有意な負の相関が認められた。これは絶望感が高いほど、成功の原因を外的、変動的、特殊的な要因に求めることを示している。また、統制不可能性次元の相関係数はすべて有意な傾向レベルであった。これは、正・負の事態に拘わらず、絶望感および抑うつ傾向の高い者は、その原因を統制できないと考えていることを意味している。表3から読み取れる結果は、絶望感についてのみ小島（1983）と同じように、正の抑うつの帰属様式が認められたといえよう。しかし、抑うつ尺度との間には同様の結果は認められず、その意味では一貫した結果とは言いがたい。また、抑うつの形成により重要であると指摘されている負の抑うつの帰属様式はいずれの尺度との間にも認められなかった。小島（1983）、新名（1984）、そして本研究を総合してみると、改訂LH理論はわが国では、正の事態でのみやや支持できるとしか言えないであろう。ただ、どの研究も同じ原因帰属様式尺度（ASQの日本語版）を用いており、このような結論に至るにはさらに新たな尺度を用いた研究が必要である。ASQには本研究でも明らかなように信頼性の低さが目立つ。この点での改善が第一の課題である。また、本来改訂LH理論は＜原因帰属様式→抑うつ傾向＞という因果関係の理論であり、パス解析等による因果分析も必要であろう。

引用文献

- Abramson, L.Y., Seligman, M.E.P., & Teasdale, L.D. 1978 Learned helplessness in humans : Critique and reformulation. *Journal of Abnormal Psychology*, 87, 49-74.
- Beck, A.T. 1972 *Depression : Causes and treatment*. Philadelphia : University of Pennsylvania Press.
- Beck, A.T., Weissman, A., Lester, D., & Trexler, L. 1974 The measurement of pessimism : The hopelessness scale. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, 42, 861-865.
- 福田一彦・小林重雄 1973 自己評価式抑うつ性尺度の研究 精神神経学雑誌, 75, 673-679.
- 小島理恵 1983 女子大生における原因帰属と抑うつ水準との関係 - ASQ日本版による検討 - 日本心理学会第47回大会発表論文集, 425.
- 新名理恵 1984 ASQ日本版による大学生の原因帰属スタイルの検討 日本心理学会第48回大会発表論文集, 619.
- Seligman, M.E.P., Abramson, L.Y., & Semmel, A. 1979 Depressive attributional style. *Journal of Abnormal Psychology*, 88, 242-247.
- Stotland, E. 1969 *The psychology of hope*. San Francisco : Jossy-Bass.
- Zung, W.W.K. 1965 A self-rating depression scale. *Archives of General Psychiatry*, 12, 63-70.

<付録> 絶望感尺度

つぎの質問について、あてはまるところに、○をつけてください。終わったら、すべてに○がついているか、確かめてください。

	い	どえ ちば いか といえ	どえ ちば かはい いい	は
1. 将来に期待がもてる。(*)	1	2	3	4
2. 自分の力でうまくいかないことは、あきらめる。	1	2	3	4
3. 物事がうまくいかないとき、いつまでもそういう状態が続くはずはないと思う。(*)	1	2	3	4
4. 10年後の自分の生活は、想像できない。	1	2	3	4
5. もっともやりたいことを成し遂げる時間は、十分あると思う。(*)	1	2	3	4
6. 将来、自分が重要と思っていることで、成功できると思う。(*)	1	2	3	4
7. 自分の将来は暗いように思う。	1	2	3	4
8. 今後、自分の生活は普通の人より恵まれると思う。(*)	1	2	3	4
9. 将来、幸運には恵まれないと思う。	1	2	3	4
10. これまでの経験は、将来に良い影響をもたらすと思う (*)	1	2	3	4
11. 将来のことを考えると、頭に浮かぶことは、楽しくない ことが多い。	1	2	3	4
12. どうしてもほしいものでさえ、手に入らないと思う。	1	2	3	4
13. 将来もっと幸せになれると思う。(*)	1	2	3	4
14. 物事は、結局、自分の思い通りにならないと思う。	1	2	3	4
15. 自分の将来が明るいことを信じている。(*)	1	2	3	4
16. ほしいものが手に入らないのだから、何か手に入れたいと望ことは愚かである。	1	2	3	4
17. 不幸なことに、将来は、いかなる満足も得られないと思う。	1	2	3	4
18. 自分の将来がどうなるのか、予測がつかない。	1	2	3	4
19. これからは、楽しくない時間よりも楽しい時間の方が多いと思う。(*)	1	2	3	4
20. どうせ手に入らないのだから、ほしいものを得ようとしても、むだである。	1	2	3	4

注) (*) は逆転項目を示す。